

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

		要 旨
学位申請者	安城 寿子【論文博士】(比較社会文化学専攻 平成26年3月単位修得退学)	<p>本論文は、フランスで形作られた、定期的にスタイルが更新される「モード」のシステムと内実の日本における受容の歴史とそれに伴う問題を、婦人服を中心に第二次世界大戦をまたいだ戦前と戦後を断絶なくたどり、明らかにしようとしたものである。本論では、戦前、着物をめぐり、百貨店が主導する形でメディアと連動した「モード」のシステムが既に成立していたことを指摘し、洋服の一般化とともに日本において「モード」をめぐり概念が形成されてゆく過程を田中千代の著作を中心に分析した。さらに洋服と和服を融合した日本独特の服飾のあり方を模索する試みが「モード」の枠組みと関わりながら展開していた可能性を、斎藤佳三の事例を新資料を含めて検討した上で明らかにした。続いて戦後の裁縫文化を背景にクリスチャン・ディオールに代表される海外の「モード」の受容が本格化し、それに対する対抗的な試みも行われたことを論じながら、戦後の AD センターや中村乃武夫の果たした役割を歴史的に位置づけ、和服／洋服が相互に絡み合いながら日本における「モード」の受容をめぐり葛藤が展開された歴史を描いている。本論は綿密な実証的調査を通して、常に更新され続けると同時に独創性が求められる「モード」の構造が定着すればするほど、「日本」の独自性が意識され、西欧のジャポニスムのまなざしによって不変の本質として他者化されてきた着物もまた、モードを受容する日本近代の服飾史に、変化を伴いながら密接に関わってきたことを明らかにした。</p>
論文題目	近代日本服飾とモードの関係をめぐる歴史的研究	
審査委員	(主査) 教授 天野 知 香	
	教授 小 風 秀 雅	
	准教授 谷 口 幸 代	
	助教 田 中 琢 三	
	関東学院大学 教授 神 野 由 紀	